

## 書評

河原国男著

『徂徠学の教育思想  
—日本近世教育思想史における「ヴェーバー問題」—』

門 脇 厚 司\*

本書は、日本教育史を専門とする研究者が20年以上かけて研究してきた成果を500ページをはるかに越す大著にまとめた書物である。こうした本を書評する者として教育社会学を専門とする評者が相応しいかどうか、評者自身ためらう気持ちが少なからずあった。しかし、編集代表からの強い要請があったこと、本書が研究の対象にしている荻生徂徠の教育思想は、「社会力」を育てることの重要性を主張してきた評者にとっても極めて関心をそそられるものであること、また、本書が分析のために依拠している二人の著名な学者、わが国を代表する政治思想学者・丸山真男氏と、社会学の創設者の一人であり今もって社会学研究の古典的位置を失っていないドイツの社会学者・マックス・ウェーバーには、評者もまた大学の学部および大学院時代から多くを学ばせてもらってきていること、そうしたいくつかの個人的な事情や関心やらがあることであるが、本書を一読する誘惑もまた絶ち難く、書評を引き受けることにした。おそらく、本書は「日本の教育史学」など他の専門誌でも多く取り上げられることになるのだと思う。そんな中で、教育社会学を専門とする者がどのような読み方をしたかを書き留めておくこともまったく無駄ではないはずである。そう考え、以下、紹介と若干のコメントをしてみたい。

内容に入る前に、本書の目次を紹介すると次のようになる。

序 章 本研究の課題と方法—丸山真男徂徠学研究の教育史における有効性の問題

第1章 問題の設定—日本近世教育思想史における「ヴェーバー的問題」

第2章 人間形成における理念的超越性と現実的所与性の志向—仁斎学にお

---

※筑波学院大学

る陶冶論的教授の思想

- 第3章 理念的超越性の立場からの徂徠学の構想—秩序構成主体に関する種々の人間形成思想の展開
- 第4章 公的領域における現実的所与性の立場—「正学」派朱子学者頼春水の「学政」論の一特質
- 第5章 私的領域における現実的所与性の立場—宣長学における一元論的思惟傾向と教育認識の問題性
- 第6章 日本近世教育思想史における「ヴェーバー的問題」の思想構造—人間形成思想における理念的超越性の契機の後退

以上の目次および構成から本書の内容を理解するのは簡単なことではないはずである。そこで、書評的な部分に入る前に、本書で展開されている内容のポイントを説明しておくことにしたい。

まず、序章に当たる「本研究の課題と方法」であるが、本研究が何を課題とし、どのような方法に基づきなされたかが説明されている。端的にいえば、本研究は、徂徠学の特質を日本近世教育思想史の展開をつうじて近代的な教育思想の形成という観点に基づく「ヴェーバー的問題」という視角から究明することを主題としている、ということになる。とはいっても、まだ分かりにくいはずで、より具体的に内容に入り込めばこうなる。

日本近世とは、本書では、18世紀に属する思想史上の系列に限定されている。すなわち、伊藤仁斎（1627-1705）、荻生徂徠（1666-1728）、頼春水（1746-1816）、本居宣長（1730-1801）といった系列である。

その系列は著者にしたがえば、以下のように要約されるという。

先行する思想（朱子学）に対する懐疑とともに、仁斎は「超越性」と「所与性」という人間形成における思想的契機を重んじた。そのうち、超越性の契機は、「道」に対する「教え」という人間の後天的な働きによる人間の価値的变化を重んずる行為としてあらわれた。それによって、人間のあり方の所与性を越える、近代的といえる人間形成思想の史的形成にあずかった。こうした仁斎の超越性の契機をより顕著に受け継いだのが徂徠で、「近代的」といえる主体形成の思想を展開した。しかし、徂徠が没した直後に生まれた宣長は人間形成において超越性を重視する徂徠の立場に反撥して、人間のあり方の所与性を根本的なものとして主張し

た。同様に春水も、徂徠とのかかわりのなかで所与性を主張した。かくして近代的な人間形成の思想を孕んだ超越性の契機はその後大きく後退していくことになった。

このような系列は「思考法の史的経過という点で普遍史的視野」から、丸山眞男『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1952）がほぼ同一の対象について論証していた。丸山によれば、「朱子学の自然法的普遍的理法—「理」の概念によって、自然法則（「所以然」）と当為規範（「所当然」）とを連続的・統一的に捉える思考法—に対する懷疑を起点として展開する一連の思想史系列」としてその基本的な性格を捉えることができるとされるが、本書は、その経過のなかに「近代的」な教育思想の特徴を摘出しようとする。

近代的という場合、著者・河原は、丸山の研究から「作為」説に準拠する。神の「御所為」としての自然ではなくて、人間の「作為」の自覚に示された「形成意志」は、その理想的社会を集合的に構成する人間主体そのものを対象とし、理想の人間のあり方の実現をめざした人間による主体の形成の思想としてどのように明らかにされたかどうか、という問題であると著者はいう。著者の言を引用すれば、『『自然』と『作為』という対立項は、認識枠組みとして政治思想のみならず教育思想の特質を捉える場合にも部分的には有効に働く。ひとびとの集合的な全体にせよ、人間個人にせよ、ひとしく秩序の形成にかかわるからである』という。こうした視点によって「無自覚的な『自然』からの受動的な形成と、自覚的な『作為』をもっての能動的な形成とを識別することができる。そして「作為」の論理は、たしかに秩序構成主体の人間形成のあり方をも「道」の実現にかかわる不可欠な課題として要請する」ということになる、と。

丸山の研究をこのように引き継ぎながら、著者は、その認識の枠組のみでは人間形成思想に modern を捉える視点としての有効性は十分ではないとする。「他者による支配ではなく、自己自身による支配（自己支配）というものをどう規定するかという問題」を根本的に重視する必要があるからだという。その場合、「諸個人の内部の規範そのものを絶対化せず、独我的ともいえる自己の主体性の発揮にならないためにどうすることが要請されるのか。この点で、自然法的普遍的理法というものに依拠しえぬとすれば、諸個人に共有され、現実の諸個人の所与を越えるときに、なにほどか普遍性（客観性）をそなえた価値的理念的な基準尺度との関連を含んだ、諸個人の外部秩序のいかに問われる必要がある」と主張

する。そして、人間形成の実現に際して、もっぱら内部的に「我が心を以て我が心を治むる」のではなく、人間のあり方を外部的に在る価値理念的な基準尺度をもって適切に測ることを課題とした思考様式が日本近世において展開したとするなら、その思想は具体的に誰によってどこまで達成されたか、という問いを設定する。そして、この問いに答えるための接近視角として、マックス・ヴェーバー(Max Weber, 1864-1920)の「考量」概念が再構成され、それに基づく内容分析によって日本近世教育思想の歴史が記述される。その意味で、ウェーバーの考量概念の再構成に当てられた第1章(問題の設定)は本研究の中で極めて重要な位置を占めることになるが、概略次のようである。

「M. ウェーバー『考量』概念の教育思想的考察」と題された第1節で、著者はウェーバーの社会科学論の中から「人格」論を中心にとりあげ、とりわけ「考量」概念に焦点をあてて、その特質を教育思想史的な角度から考察している。すなわち、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」というよく知られる実証的論文とともに、「ロッシャーとクニース」「文化科学の論理学の領域における批判的研究」などの学問論から、「人格」論が再構成され、その「人格」論からとくに目的・方法・結果についての計算可能性を準則とした「考量」(Erwaegung)の働きにみちびかれた合理的な生活態度が、人間の理想的あり方としてとりあげられ人間形成の思想として記述されていたことを明らかにする。

それに続く第2節「日本近世教育思想史における『ウェーバー的問題』」では、合理的な生活態度についての解明をふまえ、ウェーバーによる中国儒教論と「封建日本」論とがとりあげられ、徂徠学の特質を究明するための接近視角が構成されている。具体的には、まず、中国儒教論において、ウェーバーが把握した2種類の実践的な合理主義が、人間形成思想の領域において明らかにされる。すなわち、(1)超越性を志向するとともに、世俗内でひたすら没我的に即事的な態度(Sachlichkeit)をもって職業的課題(Beruf)それ自身に専念する「内面的緊張」をもった禁欲的プロテスタンティズムの「現世支配」的な人間形成思想と、それと対照的な、(2)もっぱら「人間関係優先主義」(Personalismus)と要約された現実的所与を重んずる、「内面的緊張」を欠如した、中国儒教の「現世適応」的な人間形成思想の2つである。こうした2つの人間形成思想の対比をおこなって後、著者は、儒教の思想的圏域に属する日本近世の教育思想史の文脈で、これら2つの人間形成思想がどのような展開を示すことになったか、という問いを設定する。

この点で、本研究は、ヴェーバー社会科学の方法を日本近世教育思想史の領域に適用したものであるといえ、著者自身、「ヴェーバー問題」(内田義彦「日本思想史におけるヴェーバー問題」、内田芳明『ヴェーバーとマルクス』)といわれる問いを究明する試みであると性格づけている。

ウェーバーの社会科学論を読み込むことで再構成した分析概念によって分析され記述された近世教育思想の歴史の内容は概略以下のようである。

第2章：近世儒教の発展史のなかで徂徠学に先行する仁斎学には、人間形成思想を規定する重要な両極志向性があった。すなわち、人性の現実的所与を重んずるとともに、その人性から超越する理念への志向性をも内包していた。後者をあらわす「道」は、身近な人間関係における人間の理想的あり方の當為規範(「人倫日用当に行くべき路」)であった。こうした規範は、けっして実現困難なものではなく、実現可能にする人性上の倫理的根拠をもつ。すなわち、仁斎は、孟子の「四端の心」の説に拠りつつ性が善であるという現実的所与を重んじ、各人はこの性を先天的にもっていること(性善説)を根拠としつつ、その「拡充」を意味する実践的行為によって「道」を実現することを、理想の人間のあり方の実現のために期待した。このように仁斎学には、「理念的超越性」と「現実的所与性」という両極の志向性があった。こうした両極は、価値的目標と「学」の担い手としてあらわれるが、この二者の関係だけでは人間形成の目的達成のための原理は成り立ちえないと指摘する。そして、著者は、両極の志向性を有効かつ適切に仲立ちする働きを担うものとして仁斎が尊重する「道」との関連性の自覚をもった、「師」の「教の功」に注目する。本書は特にこの点に立ち入り、仁斎のいう師説の内容を明らかにし、その特質を陶冶論的教授の思想として把握する。

第3章：徂徠学の特徴を記述した章で本書の中核をなす。各節の概要は以下の如くである。

第1節：著者は、まず、第1章でおこなわれた問題の構成が、研究方法上から、もっぱら外側から企図されたのではなく、それとともに、対象に即しても根拠をもっていると指摘する。すなわち、人間形成の思想的契機としての理念的超越性を導く、計算可能性を準則とするヴェーバーの「考量」概念と類似する思考の様式が、測定尺度を「道」とする徂徠の捉え方にも認められるとする。こうした指摘をふまえて、「道」についての関心を著者は、(1)万人といえるひとびとの集合的な社会的秩序を「作為」の論理に基づき形成(構築)するさいに準拠する根本的

尺度についての関心、(2)この社会秩序を構成する主体を「作為」の論理に基づき形成するさいに準拠する根本的尺度についての関心、と整理する。第2節以下に論証されるのは(2)の関心領域である。この思想を著者は理想の人間のあり方を実現する主体の点で、2つに大別している。「君子」という理想的為政者となるべき者(士)の教育課題と、万人(衆人)の教育課題である。

第2節：「君子」たるべく期待された者の人間形成の思想について。「講釈」の弊害についての認識とともに、詩書礼楽に関する古典読書をつうじて、為政者たる以前に、「学者」としての人間のあり方をもとめる主体形成の方法論が跡づけられ、主体の個体的な資質を重視する「気質」、主体の長期的成長を尊重する「長養」、主体の自発的理解を期待する「自得」という考え方がその方法論の根底に示されていることが明らかにされている。

第3節：「君子」たるべく期待された者の人間形成の思想についての記述で、論語の注解、学校史記述、書簡をとりあげ、師を学ぶのではなく、師の学ぶところを学ぶということ、すなわち、徂徠は理念的超越性をもった「道」を志向する師弟関係をつうじて人間形成を実現するという、「学」の基本的様式を追求していることが明らかにされる。

第4節：万人の人間形成の思想についての記述に当てられ、「気質」と「職分」との関係の問題をめぐって、各人がそれぞれに「材」(「人材」)たりうる働きの才(「運用當為の才」)や協調的諸資質(「相親し相養ひ相補け相成すの心」)など諸個人の長所を発達させる「人材」育成によって、理想社会、「聖人の世には棄材なく、棄物なし」という公共善を実現する社会を構成する主体の形成にむけた人間形成思想が究明されている。

第5節：引き続き、万人の人間形成の思想について記述し、徂徠は、「風俗」の自然状態にまかせるのでも、「人を喩す」という意図を明確にした学校教育でもなく、人々を持続的に習慣づけてゆく人為的な制度としての「礼楽」を実践する結果的機能によって、両極的な人間形成の諸課題の解決を果たす Sachlichkeit 原理を展開していたと指摘する。

続く4章と5章では、徂徠学を批判する18世紀後半の思想家として頼春水と本居宣長と取り上げ論評を加えている。

第4章：まず、4章では、人間形成の現実的所与性の思想的契機を公的領域においてあらわしていた事例として、「正学」派朱子学者・春水の「学政」論を取り

上げ、「公」の実現にかかわって徂徠学と相違していたとする。徂徠学には、万人によって担う公共性があり、学政論のなかで自覚される公は、公教育を統制する家産官僚制的権力機構によって遂行される官職上の職務を指していたとし、その観点から、著者は、アンシュタルト（公的機関）としての性格をもった学校の教育関係のあり方も構想されていたと論ずる。とりわけ、所定の師に対する弟子の制度的な帰属に基づく恭順を厳格に求める「師弟分け」という概念の構造を分析しつつ、春水の家産官僚制的特質を明らかにし、それは中国儒教にヴェーバーが見出した現世適応的な合理主義として特徴づけられる人間形成思想と同質の「儀礼的定型化」と呼べる固定性を帯びていたとする。

第5章：第4章と同様、徂徠学に批判的な人間形成の現実的所与性の思想的契機をあらわしていた事例として宣長を取り上げる。徂徠学の「作為」の立場を受け継いだ宣長ではあったが、神の「作為」の立場を確立した宣長にあっては、人間は「神の作為としての自然」に委ねるという「ありのまま」の現実的所与にしたがう生き方の姿勢こそ重んじられべき存在だった。そのような立場についての先行研究の所見を受け継ぎながら、著者は、宣長のいう立場は、自覚的な「教え」を否定したにとどまらず、理想的人間のあり方の実現をめざす意図的な努力としての人間形成の技術的な取り組みを否定する観念を生み出したことを実証的に究明している。

第6章：仁斎から宣長まで近世教育思想史の特性について記述し来たった最後に、「ヴェーバー的問題」の視角から個々の思想的特質を整理し、著者は総括し次のように結論づける。

「人間の主体的形成における理念的超越性と現実的所与性の思想的契機にかかわる歴史的構造の問題が、18世紀全体の教育思想史的景観に存すること」。すなわち、『『アジア的・後進的社会の歴史的問題性』』といえる、Personalismus とその人間関係に基づく Stereotypierung を基調とする現実的所与を重んずる人間形成の思想が、18世紀後半の思想領域に見出されるとともに、他方、その問題性を乗りこえる modern といえるヴェーバー的な契機をもった徂徠学の人間形成の思想も、高度な達成をもって18世紀の前半に見出される。そのありようは、丸山が『日本政治思想史研究』のあとがきで回顧していた、「日本思想の近代化<sup>バグーン</sup>の型」、それが一方西欧に対し、他方アジア諸国に対してもつ特質の一つを教育思想領域において把握したことになろう」と。

やや長い紹介に過ぎた感があるが、以上が本書の内容の概要である。このような本書の内容が、数多い関連する先行研究に照らして、的を得た妥当なものであるかどうか、またどの点に本書の独自性があるのかを具体的に指摘できるだけのこの研究領域に精通した学識や力量を評者が持ち合わせているわけではない。しかし、大学の学部時代から、ウエーバーや丸山の古典的研究書を読みつつ学び(学部2年生の夏休みにウエーバーの『プロテスタンテイズムの倫理と資本主義の精神』を読んだときの興奮と、3年生の春休みに丸山の『現代政治の思想と行動』を読んだときの衝撃は今でも再現することができる!)、わが国の社会のあり方について考え、社会の担い手たる諸個人が備えるべき資質能力について考え、そうした資質能力を育てるためのあるべき教育について考えてきた一人の教育社会学者として、本書をどう読み何を考えたかを書き留めることで書評とする意義はあるものと考えそうすることにしたい。

索引まで含めると565ページになる大著にまとめることになった長きにわたる研究によって著者が為そうとし明らかにしたかったことを強引に整理すれば、マックス・ウエーバーが、近代的人間(資本主義の精神)を、プロテスタンティズムの倫理に見出した視点と用いた概念を丹念に洗い出し再構成する作業をなすことであり、そうした基礎作業を通して明晰になった視点と概念によって、徂徠学と呼ばれる徂徠の人間形成思想の核心は、人間たるもの、「道」なる超越的な理念を追求し、事実を事実として理解する態度を育て徹底することで、自己の行為の目的や手段のみならず結果までも明晰に考量できる自己を形成し、日常生活において為さねばならない自己の職分を合理的に全うすることである、ということになろうか。

著者の意図と本書の内容をこう整理することが可能なら、本書は十分に説得的な内容に仕上がっているといえる。少なくとも評者にとっては興味深くもあり、かつ教えられることの多い書物であった。このような大著を仕上げた著者の真摯な研究態度と努力に対し多大な敬意を表しておきたい。

その上で、「人が人とつながり社会をつくる力」としての社会力概念を提唱し、そのような資質能力を育てることこそ教育実践の重要な課題であると主張してきた者として一つだけ注文をつけておくことにしたい。

それは、端的に言えば、朱子学の批判的再構築を旨とした仁斎や徂徠の人間形成思想は、自立し自律的であり知的で合理的な判断にもとづき行動することを特



性とする近代的人間ないし近代的主体が孕む問題性に適切に対応できるのか、主体的であることを後生大事にする近代的人間の問題性を克服する契機を内在させているかという疑義である。こう疑義を呈することで想起してほしいのは、プロテスタンテズムの宗教倫理を体現し、神の思召しである職に禁欲的に励むことで産業化を達成した近代的産業人が「精神なき専門人、心情なき享楽人」に堕することになろうとウェーバーが予言していたことや、民主主義社会の実現とその担い手である近代的人間を考え続けた丸山が想定していた「近代」とは、単に歴史上の近代ではなく、理念化されたプロセスとしての近代であったこと、同時に、丸山は、自律的な人間が必ずしも近代的人間ではなく、他在や他者に開かれていることこそ近代的精神に他ならず、他者感覚を持つ人間によってつくられる社会が近代社会であり、民主主義社会としての近代社会の実現は永久に続く革命である、と考えていたことをどう受け止め、今後、仁斎、徂徠、春水、宣長らの著作を読み込んでいくか、ということである。社会力概念を提唱している評者自身はといえば、可能なら、他者との関係構築に焦点を当て、子安宣邦氏の研究に導かれながら、まず仁斎を読み込んでみたいという願望を抱いていることを申し添え、書評ならざる書評を終えることにしたい。

河原国男著『徂徠学の教育思想史的研究

—日本近世教育思想史における「ウェーバー問題」—』

溪水社、2004年、8,000円